

「哲学」としての倫理学の成立とその影響
——西田幾多郎の『善の研究』から——

服部圭祐（京都大学）

本発表の目的は、西田幾多郎(1870-1945)が『善の研究』(1911)で展開した哲学説の検討を通じて、「倫理学」という学問が「哲学」の一領域として遂行されることの意義を考察すると同時に、この「哲学」的倫理学の構想が日本の哲学・倫理学研究に与えた影響を瞥見することにある。今日において『善の研究』は、日本で初めて独創的な「哲学」の体系を提示した著作とみられるが、そのことは言い換えれば、当該著作が「倫理学」を「形而上学」等と並ぶ「哲学」の一領域として遂行する発想を具体化した最初の試みであることを示している。我々はこの点に着目することによって、現在において当然視されている「哲学」としての倫理学観が、歴史的に形成された一つの哲学・倫理学的見地と結び付いている事実を見出しうるだろう。

西田の『善の研究』は第一編「純粹経験」第二編「實在」第三編「善」第四編「宗教」の全四編からなる著作であるが、これは彼の「哲学」が、認識論・形而上学・倫理学・宗教哲学という異なる四つの領域を包括する一つの体系的思索として展開されていることを意味する。しかしながら、このことは同時に、それまでの日本の思想界において、「哲学」と並立する別種の学問とみなされていた「倫理学」が、この著作において「哲学」的諸領域との必然的連関を有するべき課題として扱われるようになってきている事実を示している。本発表は第一に、彼の哲学説が現状のような形で形成されたことの原因が、彼が「知識と実践の一致」という観点から、人間の「知識」と道徳的「実践」の双方の根源を——「純粹経験」としての——「實在」に置いた点にあることを確認しつつ、そのことが彼の「倫理学」における考察に対してどのような影響を与えているかを見る。

ところで、西田が『善の研究』において「哲学」の一領域としての「倫理学」の構想を具体化したことは、それまでの日本の思想界において、主として「道徳」現象を対象とする「科学」の一領域として捉えられていた「倫理学」が、「道徳」現象の形而上学的基礎の考察へと転換されたことを意味しているといえる。だが、そうした彼の議論は結果的に、それ以後の「哲学」研究一般に対して、「倫理学」に対して基礎を与えるべき思索としての性格を付与する結果をももたらしたように思われる。それゆえ、本発表は第二に、こうした「哲学」としての倫理学観の形成が、それ以後の日本の「哲学」に対して、道徳的な「実践」のための知識としての——ある種の「教育的」な——役割を担わせるものとなっていることを、西田によって提起された「哲学」観ならびに「哲学」の一領域としての「倫理学」観を当時において共有または継承している、幾人かの研究者の著作に即して確認することを試みる。